保育士・保育教諭による
多胎児の親支援のありかたを考える

神戸市私立保育園連盟　養成向上⑤委員会

研究発題園：
幼保連携型認定こども園　神戸学園都市 YMCA こども園　松田康之
幼保連携型認定こども園　YMCA 保育園　小澤昌甲
幼保連携型認定こども園　西神戸 YMCA 保育園　村上祐子　水島弘恵

要旨

多胎児の親の育児は、過酷な状況にある。その親を支える専門職として、認定こども園・保育園（以下保育園とする）を利用している多胎児の親の思いを知り、保育士・保育教諭(以下保育士とする)、保育園の役割を明らかにすることを、目的とした。

方法は、A 市内の保育園に通園している多胎児の親 13 組 16 人に研究協力を得て、半構造化インタビューを行い、質的に分析した。倫理的配慮として、不利益を受けない権利、自己決定の権利、研究目的、内容を知る権利の保障を行い、プライバシー、匿名性、機密保持を確保した。

結果、保育園を利用している多胎児の親の想いには、親が保育士に期待する保育として、「子どものことを伝えてほしい」「園でやっていることが、子育てのヒントになる」「多胎児をセットではなく、子ども一人ひとりとして大切にみてほしい」「多胎で手がかかるから子育てを一緒にしてほしい」「一緒に育児を悩み、考えてほしい」があった。保育士が行う親の支援に関する想いとして、「私のことを気にかけてほしい、認めてほしい」「多胎児育児のイメージをもってほしい」「さっと気づいて手伝ってくれる」「声をかけやすい関係性を築きたい」「自分の子どもは自分で育児しないといけない」があった。園が行う支援に関する想いとして、「入園前に園のことを知りたい」「園に安心してあずけたい」「多胎児の身近な情報がほしい」「園にあずけることが心のゆとりにつながっている」「仕事でなくてもあずかってほしい」「社会制度は多胎児家庭のことを分かっていない」があった。

これらの結果から、保育士の役割として、多胎児の親に対して保育士自ら積極的にかかわり、まずは、親のサポートをすることを考えること、多胎児家庭の状況を理解しようという姿勢と単胎児育児の子育てを多胎児育児に当てはめて考えたり、押し付けたりすることなく、配慮してかかわること、多胎児の親同士のかかわりの機会の提供が考えられた。また、保育園の役割としては、親の心身の健康のための時間の確保ができるように園の態勢を見直し、多胎児の親のアドボケーターとして行政機関などに、多胎児の親の状況を説明する役割もあると考えられた。

Ⅰ．はじめに

1968 年頃より不妊治療が始まり、1983 年に日本で最初の体外受精児が誕生、その後多胎妊娠は急激に増加した。1980 年代後半以降に多胎出生割合は急増し、2005 年にピークを迎え、自然状態のほぼ 2 倍となったが、2005 年以降は減少傾向に転じ、現在は、その減少傾向が鈍化し、多胎の自然発生頻度に近くなっている。とはいえ、年間に出産する母親のおよそ 100 人に 1 人が多胎児の母親である。これは、1996 年に日本産婦人科医学会が、多胎妊娠には母子の生命リスクを高めるといった医学上の問題点があることの指摘を受け、多胎妊娠防止のために移植胚数の制限と排卵誘発剤の使用量の制限を記した「多胎妊娠防止に関する見解」を発表した。その後も、不妊治療進歩や社会情勢を鑑み、本見解は改定されてはいるが、多胎妊娠の防止については変更していないことが功を奏していると考えられている[1)]。

一方、女性の就業率は増加し、25 歳～44 歳の女性では、ここ 10 年間で 1 割増え、70%を超えた[2)]。この社会事情に伴い保育園に入園する多胎児が増え、神戸市内でも 2010 年度に 99 組、2015 年度に 103 組、2019 年度 157 組となっている。

多胎児を育てる家庭は、子育ての負担が大きく、様々な子育ての困難感を抱えている。例えば、１歳児を育てている親では、余裕のない多胎児育児に対する自己嫌悪、家族間の関係や調整に関するストレス、周囲や近所の無理解に関するストレスなどがあげられている[3)]。2018 年の岐阜県での 3 つ子の次男の虐待死の事件では、育児の過酷さが母親を追い詰めたことは記憶に新しい[4) 5)]。このような状況の親子に対して、保育士にも他の専門家と同様に、多胎児の親の支援が求められる。

そこで、保育園を利用している多胎児の親の想いを知り、保育士、保育園の役割を明らかにすることを、本研究の目的とした。

多胎児の親の育児には、特徴的なところはあるが、子育てという意味では単胎児の親の困難感と共通する部分があり、本研究はすべての親の子育て支援を考えることにもつながり、その意義は大きい。

Ⅱ．対象・方法

１.研究デザイン

半構造化インタビューを用いた質的記述的研究である。

２.研究期間

2019 年 10 月～2020 年 2 月

３．研究参加者

保育園に通園している多胎児の親。可能なら 3 歳までの多胎児の親。13 組。

４．データ収集方法

A 市内の 171 カ所の保育園の園長に本研究協力依頼をし、同意を得た園を研究協力施設とした。研究協力施設の園長が研究参加者に口頭と文書で研究依頼を行い、同意を得た方にインタビューによりデータ収集を行った。

５．インタビューの質問内容

2 歳までの子育ての中で、「育児において大変だった・困難だったこと」保育園において

「保育士のかかわりや対応でよかったと思うこと」とした。

6．分析方法

研究参加者ごとにインタビューを IC レコーダーに録音し、録音した内容を繰り返し読み、データの意味を捉え、【多胎児の親の想い】に関連するすべての部分を抽出し、項目ごとに分けた。さらに、これらの項目を類似性に基づき分類してそれらに共通する名称(カテゴリー)を付けた。以上の全過程において、研究指導者のスーパーバイズを受けることで、研究の妥当性を確保した。

7．倫理的配慮

研究協力施設には、保育園の園長に文書と口頭で本研究協力依頼をし、同意を得た。協力しなくても不利益はないことを説明で加えた。研究参加者に対しては、研究協力施設の園長が研究参加者に口頭と文書で研究依頼を行い、同意を得た場合に限り日程調整を行った。インタビュー時は文書と口頭で依頼内容を説明し、同意を得たうえで実施した。実施の際には、プライバシーを守り、匿名性を確保した。また、インタビューデータは、漏出しないように、IC レコーダーの管理場所等に鍵をかけるなどして安全性の確保を保証した。

Ⅲ．結果

1．研究参加者

研究協力者は、表 1 のとおり 13 組で、うち 3 組が夫婦でインタビュー協力があったため研究参加者は 16 名であった。子どもの年齢は、1 歳 11 か月から最大 5 歳、双子が 12 組、三つ子が 1 組であった。

表１　本研究の研究参加者

参加者	子どもの年齢	保育歴	双子or三つ子
Ａさん(2名)	３歳６カ月	２年６カ月（０歳児クラス入園）	双子
Ｂさん(2名)	１歳８カ月	１年２カ月 （認可外７カ月＋今の園７カ月）	双子
Ｃさん	１歳７カ月	６カ月（１歳児クラス入園）	三つ子
Ｄさん	３歳４カ月	１年６カ月（１歳児クラス入園）	双子
Ｅさん	３歳	２年（１歳児クラス入園）	双子
Ｆさん(2名)	２歳５カ月	１年６カ月（０歳児クラス入園）	双子
Ｇさん	２歳	６カ月（１歳児クラス入園）	双子
Ｈさん	１歳11カ月	６カ月（１歳児クラス入園）	双子
Ｉさん	１歳３カ月	６カ月（１歳児クラス入園）	双子
Ｊさん	３歳９カ月	２年２カ月 （認可外１年８カ月＋今の園６カ月）	双子
Ｋさん	３歳10カ月	３年６カ月 （赤ちゃんホーム１年＋２年６カ月）	双子
Ｌさん	２歳６カ月	６カ月（１歳児クラス入園）	双子
Ｍさん	５歳	４年10カ月	双子

2．多胎児の親の想い

インタビューを分析した結果、多胎児の親の想いとして、52 のサブカテゴリーを抽出し、16 のカテゴリーが生成された。これらは、親が保育士に期待する保育と、保育士が行う

親の支援に関する想い、そして園が行う支援に関する想いに分類された。(表 2)以下に書くカテゴリーについてカテゴリーは【】、サブカテゴリーは「」、参加者の語りを斜体、研究者による補足を()で表し、述べる。

表２　多胎児の親の想い

多胎児の親の思い	項目
子どものことを伝えてほしい	集団の中での我が子の姿を教えてもらえる
	あずかっている間の自分がみえていない姿を伝えてくれる
園でやっていることが子育てのヒントになる	園でやったこと、経験、食べ物を知り、家庭でも実践できる
	保育士のかかわりで子育てのヒントを得られる
多胎児をセットではなく子ども一人ひとりとして大切にみてほしい	多胎児はセットと思われがちだが、一人ひとりを大切にみてくれる
	子どもの特徴や成長・発達を理解して、かかわってくれる
	人手の多い保育園は子どもを大切にかかわってくれる
多胎で手がかかるから子育てを一緒にしてほしい	生活の基盤ができる
	園でおいしい給食を食べている
	しつけ、行儀をみてくれる
	家では、できないことをしてもらえる
	いろいろな人にみてもらえている
	集団生活で成長できる
	きょうだいのことまで気にかけてくれる
一緒に育児を悩み、考えてほしい	保育士の専門性、子どもの成長に合わせたかかわりを教えてくれる
	子育てを一緒に考えてくれ、相談できる
	一緒に悩み相談できる存在がいることで、気持ちの余裕ができる
私のことを気にかけてほしい　認めてほしい	自分自身を気にかけてくれる
	家庭のことまで理解してくれている
	クラスを越えて声をかけてくれる
多胎児育児のイメージをもってほしい	多胎児だから持ち物、洗濯物、オムツが多いため、登降園時が大変
	提出物が子どもの数になり、同じことを書かなければならない
	事前に持ち物、お知らせを丁寧に伝えてくれて助かる
	忘れ物が多くても大目にみてくれる
	移動の大変さを分かってほしい
	多胎児を連れての園見学は、精神的、体力的にしんどい
	ベビーカーは、園に置くことができるので助かる
	保育士に多胎児育児のイメージを持たずに、望ましい保育を押し付けられる
	園長先生が多胎児家庭のイメージをもっている
	マニュアル通りではなく、臨機に対応してくれる
さっと気づいて手伝ってくれる	多胎児のきょうだいの登降園の準備を手伝ってくれる
	降園時、子どもが機嫌よく帰れるようにしてくれる
	登降園時、手伝ってくれる
	分かってくれて、さっと来てくれたり、気づいたりして手伝ってくれる
声をかけやすい関係性を築きたい	保育士が声をかけやすい場所にいる
	保育士が笑顔でいてほしい
自分の子どもは自分で育児しないといけない	自分で育てたいが育てられないから、あずけている
	自分の子どものことは、自分でみないといけないと思う
園に安心してあずけたい	園の保育を信頼し、安心している
	安心していて仕事中は、子どものことが気にならない
入園前に園のことを知りたい	入園前に園のことを知ることができて、安心
	初めて園にあずけるイメージができず、不安
多胎児の身近な情報がほしい	多胎児の情報が欲しい
	同じ園で、他の多胎児家庭とつなげてくれる
園にあずけることが心のゆとりにつながっている	園にあずけることで、心のゆとり、余裕ができ、子どもを客観的にみれる
仕事でなくてもあずかってほしい	多胎児のどちらかをあずけて一対一のかかわりをしたい
	仕事じゃなくてもあずかってほしい
	自分に休むかどうかの選択権があってほしい
社会制度は多胎児家庭のことを分かっていない	多胎児の一時保育の枠が少ない
	同じ園に入園できるようにしてほしい
	園への入園を優先してほしい
	社会は、多胎児家庭にバリアフリーではない

（1） 親が保育士に期待する保育

ここでは、多胎児の親たちは保育士に対して園での【子どものことを伝えてほしい】そして【園でやっていることが子育てのヒントになる】と思っていた。また、【多胎児をセットではなく、子ども一人ひとりを大切にみてほしい】と思っていた。また、多胎児の親の育児に対して【多胎児で手がかかるから子育てを一緒にしてほしい】そして【一緒に育児を悩み考えてほしい】と思っていた。

1）【子どものことを伝えてほしい】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは保育士から「集団の中での我が子の姿を教えてもらえる」、「あずかっている間の自分が見えていない姿を伝えてくれる」ことがうれしいと思っていた。

毎日お話させてもらうんで、今日はこんな様子だったとか先生の人間性もすごくいいので助かっています。(B さん)

子どもの様子というのは、ここに来たら先生が一人ひとり見てくださっているので、私たちが見逃しがちなところも拾い上げて育ててくださったりとか、教えてくださったりとか、知らないうちにできるようになったことが増えていたりとか、そういうところがいいなと思いました。(C さん)

お友だちとのトラブルとか、今日一日しょんぼりしていたとか、お家でも様子見てくださいと聞いて、でもお家ではそんな様子はなくて。(中略)お友だちと喧嘩することがあるんだとか、嫌なことがあったら脱走したり、ピアノの後ろに隠れたりするみたいで。家では想像できなかったんで (E さん)

私は、まぁ、園で何してるのかとか普段日中はほとんど見れないので、そういう所を色々と教えてくれるので。こっちの子は何に集中してましたよ、とか、何できるようになりましたよ、とか教えてくれるので、それは助かりますね。何をやってる、何がこの子好きなのかとか、なんとなく、見れない所がわかるのでね。(F さん)

先生たちが「耳ずっと触っています」とか「ちょっと咳ゼロゼロしてます」とか、日中見れないところを見てくれているので (H さん)

2）【園でやっていることが子育てのヒントになる】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「園でやったこと、経験、食べ物を知り、家庭でも実践できる」「保育士のかかわりで子育てのヒントを得られる」と思っていた。

「牛乳もちょっと飲めるようになったし、これから慣れてくると思うので、このタイミングで、例えば マグをなしでコップに全部切り替えて行こうと思うんです」って(保育士

が言っていた。）家だったら、やっぱり子どもも甘えてくるし、私も手がかかるから、面倒くさくなって何でも守りに入るから、できるだけ試してあげようって気持ちが毎回できるわけではないので。そういうのを言ってくださったり、サポートしてくださったりがすごく助かるので。（C さん）

保育園で食べたものを出すと、食べてくれるようになったりとか、きのこ絶対食べなかったのに、保育園でクッキングをしたら食べれるようになったりとか。（中略）食べられる物の幅は、保育園に来てからすごく広がりました。ほんっとに楽になりました。（F さん）

保育園での給食の様子を教えてもらってね、まあメニューいつもこう帰ってくるときに見られるんですけど、「こんなん食べてんのや」みたいな。「焼き魚食べれるの」とかそんな感じでしたね。（中略）試そうかなって思ったんですけど、食べへんかったらまた別のご飯を考えないといけない、二人分考えないといけないってなった時に、ちょっと新しいものを食べさせるのにすごく抵抗があって。で、「給食で食べてますよ」とかって言われて、焼きそばなんかどうやろうとかと思って、「焼きそば完食してましたよ」って言われたことがあるんで、ちょっと焼きそば食べてみってなって、そしたら完食してたんで、主食がご飯ばっかやったんで、あ、麺類もいけるんやなあって思ったりとかして。（H さん）

保育士さんともだし、園ともだし、なんかいろんなアイディアのあそび方だとか、世話の仕方とか、接し方とか見て、「はぁ、ああすればいいのか」とかみたいな。（中略）なんかあそんでるのを見たり、ちょっと保育園に迎えに来て、先生とちょっと喋ってから帰ったりする時に、なるほど…とか、あるおもちゃでそんなことをしてあそんでるんやとか。（K さん）

３）【多胎児をセットではなく、子ども一人ひとりを大切にみてほしい】

このカテゴリーは３つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「多胎児はセットと思われがちだが、一人ひとりを大切にみてくれる」「子どもの特徴や成長発達を理解して、かかわってくれる」と、多胎児はよく似ているが、一人ひとりの子どもの特徴や成長を尊重してほしいと思っていた。また、「人手の多い保育園は子どもを大切にかかわってくれる」と感じていた。

双子（次男・三男）のトイレのトレーニングをいつからするのかとか、先生のアドバイスとかで「三男はパンツでも良さそうです」とか、「次男はオムツだけど、トイレに座ってみたら、三男のを見てできるようになるかもしれないから、トイレに座らせてみたらいいかもしれないです」とか、双子だけど比べないんです。（B さん）

双子ってどうしても、なんかうちの子たち一卵性で似てるんですよ。だからなんか名前を覚えてもらえるだけでも嬉しくて。（中略）嬉しい面でっていう意味では、なんかその「〇〇と〇〇は別々」ってわかってくれてて、それぞれのことをすごい見てくれてたりとか、どうしても「双子やから似てるなー」とか、「性格は、でも全然違うから、この子ら

しいですよね、こういうこと」とか言ってくれた時に、セットじゃなくて別々でみてもらえてるって思った時とかはすごい嬉しいですかね。(D さん)

やっぱり双子なんですけど、個々の個性をしっかり見ていただいていて、うちは二卵性なので性格が全然違うんですね。それに合わせて一人ひとりに合わせて、先生たちがちゃんとしてくれているので、そのへんは一緒くたにされずにお便り帳も個々の先生たちがしっかり書いてくれて今日一日のことを伝えてくれるので、今日こんなことがあったんだとかこういうことしてくれてるんだとか。内容も全然違うので。すごい先生には助かってます。(H さん)

男と女の双子なんです。男の子の方がちょっと成長のスピードがゆっくりなんですよ。女の子が逆にものすごい早いんですけど。それでその男の子 1 歳 8 カ月まで歩かなかったですし、なんせゆっくり。だからその子をあずけるっていうのも。やっと歩いて、やっと歩き出して順調に歩いてる歩いてるっていうくらいであずけることになったからそこが心配。それも重々先生にお話しして、わかりましたっておっしゃっていただいて。(L さん)

保育園の先生たちは、こう双子だからとかっていうのはあんまりこうほんとなく、本当に一人ずつみたいな感じで見てくれてはるので (M さん)

４）【多胎で手がかかるから子育てを一緒にしてほしい】

このカテゴリーは 7 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親は、「生活の基盤ができる」「園でおいしい給食を食べている」「しつけ、行儀をみてくれる」「家では、できないことをしてもらえる」「いろいろな人にみてもらえている」「集団生活で成長できる」「きょうだいのことまで気にかけてくれる」と子育てを一緒にしてほしいと望んでいた。

言葉覚えたりとかで、コミュニケーションとりやすくなってるので。なかなか家でだと、こう難しかったりするので。(中略) 食育的なところも、目の前でピザ作ったり、育てたピーマンで食べ物食べたり、キノコ炒めて、自分たちで割いたりすることとか、それを目の前でお料理していただいて、みんながすごく美味しいって感動して帰ってくる姿とか、虫捕まえたら何時間か観察できるとか、すごくよくやってくださるのを見て、充実した体験をすごくしてるなって (A さん)

喋れるようになったのが急速に早くなったりとか、あそびのできなかったことが増えたっていうのがすごくありますね。(B さん)

双子のお兄ちゃんのことを褒めてくれる先生がいて。お掃除に来てくれてる先生なんですけど、私もつい忘れるんですけど、お兄ちゃん頑張って当たり前みたいな。なんか自分の子として当たり前と思うんですけど、「お兄ちゃん急に二人のお姉ちゃんお兄ちゃんになって大変やなぁ。」とか、なんか「いつも頑張ってるなぁ」とかって言ってくれることがすごい嬉しくって。私もなかなかお兄ちゃんに言えないし、もうそうやってなんか兄弟みんな見てもらえたことが、そうやって思ってくれる先生がいることが嬉しくて。(D さん)

保育園の先生がお箸の指導をしてくれたり、靴下を履くとか、トイレの後に手を洗うとか、そういうのも、家では流れではやっているんですけど、“こうしないといけない”という躾のような形では教えていないので。私が教えていないのにしてくれるのは、保育園のおかげだな、助かるなと。(E さん)

ここ美味しいんですよ。(昼食を)実食 2 か所して、ここすごく美味しかったんです。あの、年に 1 回親もね、一緒にお昼食べる機会いただくんですけど、美味しいんですよ。(中略) ちゃんと出汁とってあるし、バランス良いし。(F さん)

「スプーンで上手に食べていますよ」っていうのをおたより帳に書いてもらって、「家でもしていかないといけないですかね」って相談したら、「そこは保育園でしっかり教えていくから、お母さんはお母さんのやりやすいようにしてもらったらいいですよ。園でしっかりやりますよ」という風に言っていただいて、すっごく助かりました。(H さん)

保育園の先生から、「お兄ちゃん優しいですね」とか「いいお兄ちゃんですね」とかってその我が子たちを認めてもらえると楽しい、嬉しい(J さん)

５)【一緒に育児を悩み考えてほしい】

このカテゴリーは、3 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「保育士の専門性、子どもの成長に合わせたかかわりを教えてくれる」「子育てを一緒に考えてくれ、相談できる」「一緒に悩み相談できる存在がいることで、気持ちの余裕ができる」と保育士に対し、一緒に悩み、相談できると感じていた。

気楽な質問ができる環境で、たぶん悩みが全部減ってる。(A さん)

子どもも、正直産まれてすぐに病院の保育園に入ってしまって、2 カ月半入院していた状態で私たちが生まれてすぐ手元で育てていた状態ではなかったので、本当に生まれた時からいろんな人たちに抱っこされて育ってきた子だと思っています。なので、保育園にあずけるっていうのも自然と言いますか、一緒に育児を手伝ってくださると言いますか、してくださるところにあずけたいと思っていましたので、不安よりはどちらかというと期待の方が大きかったですね。(C さん)

『一緒に育児する』『育児に携わろうとしてくれてる』と思ったことが、すごい良かったのかな。ただただ保育するだけじゃなくて、この子の成長に付き添う感じがすごい良かったと思います。(G さん)

「まだまだちゃんと見てあげないといけない時期ですね」って先生から教えてもらって。ほったらかしているところがあるので、家帰ったら、「あ、そうやなあ」って。言いたいこと我慢してたりもするんだなと思って、気にかけて聞いてあげないとなっていうのを。こんなん言ってもらえないと、そういう気持ちにもならないし、気づかないんでアドバイスじゃないですけど、そういうきっかけをくれるのが多分、家で一人で子育てしてたら多分

言えない、言ってもらえないので。自分の子を他の人から見て自分では気づかないところまで教えてもらえる所があるのは、すごく助かりますね。（J さん）

「怒りすぎですか」ってきいたり、いやそこはダメって言うのは言った方がいいよみたいな。やっぱり先生ってプロやからいろんな子をみてきてるから。「こういう時はこう」って何かは先生知ってるから、そういうのを聞けたりするから。それはご飯のこととかも、野菜全然食べへんとか、そういう話をしたら「いや、こうこう」とか、「まぁ、園でもそうですけど、たまに食べるから、こういう風にしてお母さん一回やってみたら？」みたいに、「あ、そうか。その手があったか！」みたいなのもありますね。(L さん)

（2） 保育士が行う親の支援に関する想い

ここでは、多胎児の親たちは保育士に対して【私のことを気にかけてほしい 認めてほしい】 という想いがあった。 そのため、【多胎児育児のイメージを持ってほしい】 そしてそのイメージから【さっと気づいて手伝ってくれる】ような対応を望んでいた。 また保育士と、【声をかけやすい関係性を築きたい】とも思っていた 。一方で【自分の子どもは自分で育児をしないといけない】と親としての責任を感じる親の想いもあった。

1）【私のことを気にかけてほしい 認めてほしい】

このカテゴリーは、3 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親は、「自分自身を気にかけてくれる」「家庭のことまで理解してくれている」「クラスを越えて声をかけてくれる」ことを嬉しく感じていた。

私がぎっくり腰に何回かなってしまって、お迎えの時に先生が(子ども)二人を抱っこして車まで運んでくれたりとか、どっちかが機嫌が悪くて抱っこして車まで連れて来てくれてということがありましたね。(E さん)

復職して 2 年 3 年積んできたキャリアがゼロかマイナスに戻るぐらいの勢いなので、やっぱり仕事もきついんですけど、昼いっぱいいっぱいになってくるのを見て、先生の方から「無理しないでね」とか「ちょっとお母さんしんどそうな顔してたから、ちょっともし、あれだったら病院とか、もし行くんだったら見てましょうか」って、ちょっとした言葉がけとかがすごく助かりました。(F さん)

もうほんと、全然クラスが違う先生でも全然声かけてくださって「一人連れて行きます！」みたいな感じで言ってくださるので、それがすごい助かった。(G さん)

話をしてた時とかに別の先生とかから「なんか、私が見た時こうだったよー」とかなんかそういうような声だったりとかたくさんで見てもらってるんだなあとかまあやっぱり嬉しいですよね。(M さん)

２）【多胎児育児のイメージを持ってほしい】

このカテゴリーは 10 個のサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「多胎児だから持ち物、洗濯物、オムツが多いため、登降園時が大変」「提出物が子どもの数になり、同じことを書かなければならない」「事前に持ち物、お知らせを丁寧に伝えてくれて助かる」「忘れ物が多くても大目にみてくれる」「移動の大変さを分かってほしい」「多胎児を連れての園見学は、精神的、体力的にしんどい」「ベビーカーは、園に置くことができるので助かる」「保育士に多胎児育児のイメージを持たずに、（保育者などから）望ましい保育を押し付けられる」「園長先生が多胎児家庭のイメージをもっている」「マニュアル通りではなく、臨機に対応してくれる」ことから、育児をしている親のことを分かってほしいと思っていた。

忘れ物が多くても、その日その日でちゃんと、服出してくださったり、オムツの補充、借りれたりとかそういう不安、こう何も持っていってなくても大丈夫な安心感はありますかねぇ。忘れるって二つずつ忘れるので、入れ忘れなんで、でも「全然大丈夫」って先生は受け入れ万全な感じの態度で、「それぐらい大丈夫よー」みたいな（A さん）

子どもは 3(人)いても、お父さんお母さんは一人なので、そこをどう見るかなって感じですね。一人の基準に当てはめて話をされるとちょっと不安になりますね。うち二人なんやけど、とかうち 3 人なんやけどになりますね。例えば具体的な所で、仕方ないんですけど、歩けるようになってて靴も履いて外行けるようになって、その一人の子とかが自転車乗ってきたりとか余裕があったら手繋いで歩いて帰ったりするんですけど、「手繋いで歩いて帰ってもいいですね」って言われるんですけど、うち絶対無理じゃないですかっていう。ほんとはそうしたいけど絶対できないんですね。(C さん)

（オムツや荷物の名前のスタンプの話）消耗品なんで、毎日押すという感じですかね。0 歳児の時は毎日 10 枚くらいは使っていたので。(中略)(名前の)スタンプ(オムツに)押すだけなんで、楽っちゃ楽なんですけど、子どもたちわちゃわちゃしてる横でわーみたいな感じでして、今でこそ結構枚数減ったのでいいんですけど、0 歳児の時ってほんとに結構消耗量が凄かったので、毎日鞄に満タンオムツ入れて、満タンもらってみたいな感じだったので。(G さん)

ここの園は持ち物が少ないので、お布団とかもろもろがないので。お布団は全部園がしてくれるし、帽子とかそういう　服とおむつだけ捨ててもくれるし、そういうのは、まぁその分お金は衛生料って払っていますけど。(中略)処分してくれるっていうのがあったり。それは本当に。お布団持ち込みとか干したりとかそんなんはもう。二人分なので、それはありがたかったです。すごい。もうその分お金払う方が私はよかったです。(I さん)

年少になるまでは連絡帳があって、家でのご飯の内容と、排泄と、寝た時間と家での様子を書く欄があって、同じことを書くじゃないですか。それがすっごい手間で大変でした。(E さん)

とりあえず、主人がいくつか見学行って、双子でなおかつベビーカー置けるよって言ってくれたところがここで。助かりました。(中略)そうですね、すごい助かります。しかも、ベビーカーも置かせてくれるから、公立だと持って帰ってくださいパターンがあるので。(F さん)

全く状況がわかっていない先生がおっしゃったのかなっていうような状態だったので、その辺はなんかまぁね、全員を把握しろとは言わないんですけど、こう双子育児っていうのが、どういうものなのかっていうのは、ここの先生たちも知ってもらってたらいいんじゃないかなと思うんですよね。(H さん)

3）【さっと気づいて手伝ってくれる】

このカテゴリーは、4 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「多胎児のきょうだいの登降園の準備を手伝ってくれる」「降園時、子どもが機嫌よく帰れるようにしてくれる」「登降園時、手伝ってくれる」「分かってくれて、さっと来てくれたり、気づいたりして手伝ってくれる」と園内では、手伝ってほしいと思っていた。

ぐずって帰らないとか、上の子が歩きたくないし、双子は歩きたいし、ただ 3 人歩くとベビーカーを一人で見れないんで、その時の先生の上の子とか双子の対応が泣き止ませてくれるというか、子どもを機嫌よく歩くようにしてくれるというか、それはすごいなぁって思いますね。(B さん)

困ってたらもう先生が「お母さん一人抱っこして駐車場まで行きます」って言うて連れてってくれたりとか、なんか玄関先で一緒になった勤務終わりの先生が一人連れて行ってくれたりとか。(中略)もう嫌な顔一つせず、ねーなんかもうスッて連れてきてくれたりとか（中略）そういうのなんか自然としてくれる先生ばっかりなんで、もう本当にありがたいなぁと思って。(D さん)

帰りも、泣きわめく時があるんですけど、「帰らない」とか。そしたら、先生が来てくれて、「あれ乗れる？競争する？ここに泊まる？」っていうと、「泊まらない、乗る」みたいなので、そこも確かに助かりますね。ほっとかれると、私も二人はさすがに手が回らないので、確かに助かる。(F さん)

先生が何か暗黙の了解で、すごいしてくれてて。どっちか一人出して、で、もう一人はちょっとじゃあ先生が抱っこしとって待っとってねっていう風にしてくれるので、ありがたいですね。(H さん)

お母さんが自転車乗せるのにめっちゃ苦労してる、子どもの声がするなーって保育士さん降りてきてくれるんで。(K さん)

４）【声をかけやすい関係性を築きたい】

このカテゴリーは、2 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「保育士が声をかけやすい場所にいる」「保育士が笑顔でいてほしい」と思っていた。

先生の努力とか、常にこうやってくれてるのを感じるので、これ以上は望まない。ほんま先生も、笑顔でいてもらえるように、無理なことすれば、きっと先生も大変ですし、なんか先生笑ってると先生も楽しいと思いますし、もう満足してます。とても満足してます。（A さん）

保育士さんがっていうよりかは私たちも気になることあれば聞いてやっていかないとなって言う気持ちではあるんで。思ってるけど、あっちからこうですって言われるのがやっぱり嬉しいですね。（C さん）

先生たちが(声を)かけてくれたから、私もすごい(声)かけやすいっていうのはあるかもしれないです。（中略）入園の時もちゃんと声をかけてくださいましたし、一番最初の時、困っている時も「すぐやりますよ」って言ってくださったからこそ、私も困っている時に「先生お願いします」って言えるようになった気がします。言ってもらえると全然違うと思います。（G さん）

声をかけやすい雰囲気もいいかもしれないですよね。（中略）玄関入ったら、そこに事務所っていうかあの保育園のスタッフが入る部屋があったり、あと保育士さんたち、私 18 時半とかに迎えに来ると日誌とかいろんな自分の書類仕事を、机を出して保育園の部屋でやってるんで。声をかけやすいじゃないですか。子どもがちょっと荷物取りに行ったついでに、先生なんか作業してはったら。事務所にこうガッツリ事務所っていうのがあって入られると、「すいません」って行かないといけないから。（中略）ほとんどの先生にみてもらってるんで先生の顔もみんな知ってるし声かけやすいかな。（K さん）

５）【自分の子どもは自分で育児しないといけない】

このカテゴリーは、2 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「自分で育てたいが育てられないから、あずけている」「自分の子どものことは、自分で見ないといけないと思う」と育児に対して親としての責任を持っていた。

自分の子どもなので、自分でやりたいんですけど。本当は、おばあちゃんとかもあんまり手伝って欲しくないんですけど。自分の子どもなんで、全部自分でたくさんみて、一番自分がよくわかっていたい。わかっているけど、それでも見ておきたいけど、やっぱりできない。諦めてそこは、いろんな人の手を借りてやるしかなくて。（C さん）

双子だから、私は諦めて誰かが助けてくださったら、もうほんまありがたいって感じですけど、多分一人目のお母さんで、わかんなくて全部自分でしなきゃいけないっていう責任感というか。なんかね、いいお母さんであろうとすると思うので、そこは周りから言っ

てくださるとすごい助かります。(G さん)

私がほんとに限界だったので、自分の時間を持ちたいから(中略)「保育園がどんな保育してくれるんやろう」とかそういうレベルじゃなくて、もう誰かにみてもらいたいみたいな(J さん)

（3） 園が行う支援に関する想い

ここでは【園に安心してあずけたい】そのために【入園前に園のことを知りたい】と思っていた。 園に入園してからも多くの子どもたちを見ている園だからこそ【多胎児の身近な情報がほしい】と思っていた。【園にあずけることが心のゆとりにつながっている】と思っており、日常生活を支援してくれるという意味でも【仕事でなくてもあずかってほしい】と思っていた。さらに【社会制度は多胎児家庭のことを分かっていない】と思っていた。

1）【園に安心してあずけたい】

このカテゴリーは、2 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「園の保育を信頼し、安心している」「安心していて仕事中は、子どものことが気にならない」と思っていた。

熱出しそうな日とか、鼻水出している時とかは「電話かかってくるかなぁ」と思ったりしますが、それ以外は全然心配ないですね。(E さん)

気持ち的にすごく安心しました。もう任せられるねっていう。安心して子どもをあずけられる先生だなっていう。(H さん)

今のままで充分です。先生の好きなように。何でも家は言われたことを受け入れる体制で、どっちかっていうと。(I さん)

(子どもが自分に)へばりついて離れないということは一切ないんですよ。もう保育園が楽しい。あの、最近でも、「行ってらっしゃい」みたいな感じで、お絵かきが好きな子はもう来たらパーッてお絵かきに夢中になってて。あーもういってらっしゃいみたいな。(K さん)

2）【入園前に園のことを知りたい】

このカテゴリーは、2 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「入園前に園のことを知ることができて、安心」「初めて園にあずけるイメージができず、不安」と思っていた。

保育園自体も、どんな感じなのかがわからない。あずけるということがほんとに成功するのかわからない、あずけきれるのか、上手いことあずかってもらえるのかも、何もかもがわからないなっていう中での行動だったので、不安はいっぱい (A さん)

スケジュールもそうですし、物！何が必要なのか、二人分なので、結構大変というか、その二人分揃えるために、一人分やったら「どこでもええわ！」みたいになるんですけど、二人分やと結構、「え、在庫ないよ！」みたいなとか、結構あるかもしれない。限られると言うか、数がなかったりとか、「同じもので揃えた方がええんかなぁ」とか「兄弟やから、喧嘩するから」とかあるので、ある程度、用意準備するものを用意しといてもらえたり、教えてもらえると助かるのかなと。おむつとかも、常時何枚くらいあれば良いのかとか、×２なので、オムツも家にある量が結構大変なので。私だけじゃないと思うんですけど、みんな多分一人でも多分大変なんですけど、×2 で減っていくから、結構何て言うかなんか精神的にも、「オムツないぞ！」みたいな。(G さん)

子育て広場でちょくちょく遊びに来させてもらってたから園の雰囲気も知ってたし、私もすごい好きな雰囲気、子どももすごい楽しそうに遊んでいつも帰るし。〇〇園さんやったら入れようかって、やってみようかなって思った(L さん)

３）【多胎児の身近な情報がほしい】

このカテゴリーは、2 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「多胎児の情報がほしい」「同じ園で、他の多胎児家庭とつなげてくれる」と多胎児育児の情報提供を望んでいた。

やっぱ 双子育児っていうのが情報が少ないんですね。ネットでの情報とか本での情報とかあるんですけど、やっぱり生身の情報っていうのがすごく少なくて。多分一人とかだったらね、他のママさんとかに聞けばわかるんですけど、双子ってまぁ、あんまりいないんですよね。だからその辺で私もすごい困ったので。(H さん)

本園の方には双子さんがいらっしゃるんですけど、それを知ったのが、親子遠足っていう時に園長先生が呼んでくれて、「双子の先輩のママとパパやね」っていう風に、「ちょっと話聞きたいことあるなら聞きー！」って。輪をつなげてくれたりとかしたんで。その辺は、「こんなんどうでした？どうでした？」っていうのが、聞けたので。(H さん)

ここの多胎児さんを、園長先生が 1 回。うちより年少さんなんですけど、なんか親子遠足の時に紹介してくださって。で、ちょっとお話したのかな…「どんなんですか？」みたいな感じで聞かれて、「1.5 倍くらいですよ」って。「勝手におさえるとこおさえとったら、ほったらかしてます」みたいなそういうかかわりが持てたんで。あの方どうしてるんかなっていうのは気になる…気になってるんですけど、それ以外は行事とかでも会えてなくて、またお話ししたいなというのがあるんで。(中略)同じ保育園やったら、何かしらで会うと思うので。そういった人との方が関りが持ちたいなと…持ちやすいと思うので。（J さん）

４）【園にあずけることが心のゆとりにつながっている】

このカテゴリーは、1 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「園にあずけることで、心のゆとり、余裕ができ、子どもを客観的にみれる」と感じていた。

保育所行きだして、ちょっと心の余裕が、あの客観的にその、自分の子どもが可愛さも倍増しましたし、ちょっと子どもと離れてる分、すごい「可愛いんや」ってのが思い知らされる（A さん）

（子どもと）離れてる時間があるから、（中略）やっぱりなんか、会いたかったっていうお迎えに来た時に気持ちとかがあって、やっぱりこう離れてる時間がこう大事なんかなと思いつつ、仕事が大変になってくるとなんかもう、なんでこんな…みたいな気持ちになりつつ、だから今はほんとに仕事もちょっと余裕をもってさせてもらいながら、保育園でも見てもらってるので、ほんとにずっと一緒やったら気が狂うんじゃないかと思うぐらいですね。（D さん）

あずかってもらってるからだと思います。たぶん、べったりやったらしんどいと思います。24 時間一緒やったら。昼間は仕事してるから、帰ってきてご飯あげて、あ、こんなん見てあげないとって思うからできるのかな。（K さん）

常に休みの日でも二人が一緒にいたので、休みが休みじゃないみたいになってて、ほんとに美容院にも行けない、ゆっくり寝る、昼寝もできない、買い物もあの普通にスーパーに行くのも、二人連れてたら大変なので、それもできないって状況だったんですけど、ちょっと仕事の勉強してみようかなとか心と体の余裕ができました。（J さん）

やっぱり楽にはなりましたね。子どもに優しくなったというか。やっぱりずっと一緒にいると、やっぱり私も親やから　あかんかもしれへんけど、イライラもするし、もうちょっと一人にして！って思うこともあるけれど、それがね、そういう時間も働いているとはいえ、あるから。でも心配なくあずけれてるから、そこは私自身はなんかこう結構軽くなったかな。（L さん）

５）【仕事でなくてもあずかってほしい】

このカテゴリーは３つのサブカテゴリーから構成されていた。多胎児の親たちは、親の役割を放棄するのではなく、生活をしていくうえで「多胎児のどちらかをあずけて一対一のかかわりがしたい」と一人ひとりとの関係を大事にしたり、生活を立て直す時間のために「仕事でなくてもあずかってほしい」「自分に休むかどうかの選択権があってほしい」という想いがあった。

土曜日って、基本なんか働いてなかったらあずけられないとかだったんですけど、でもそれこそ気持ちの、こう支えてもらいたいとか心身の疲れとか。一人になりたいとかお兄ちゃんと、過ごしてあげたいなとか。「双子で生まれた子」って二人セットで一対一でかかわったことが、もうほぼほぼなくて。（D さん）

自分の試験がもう１か月前とか迫ってたんでね。国家試験なんですけど。その時にやっぱり勉強する時間が全くないんですよね。（中略）ここだけは絶対に集中してやりたいってそういう勉強会があったんですよ。土曜日かな？（中略）この５回だけはお願いできません

でしょうかっていう風にお願いしたんですけど、駄目だったんですね。仕事でないのでダメですって。（中略）ルールに厳しいんだなって思いました。（M さん）

「家庭保育できるのであれば」っていうのはね。言われたときは、もう二度と土曜保育には入れないと思いましたね。正直。そういう事を言われるのであれば、もういいわと思って。（H さん）

あずけたいなって思う時があったときにあずけてもいいよって言ってくれたお願いをするでも基本は何も無かったら休む で、どっちも選択できるっていうのはすごい嬉しい。（M さん）

６）【社会制度は多胎児家庭のことを分かっていない】

このカテゴリーは、4 つのサブカテゴリーで構成されていた。多胎児の親たちは、「多胎児の一時保育の枠が少ない」「同じ園に入園できるようにしてほしい」「園への入園を優先してほしい」「社会は、多胎児家庭にバリアフリーではない」と思っていた。

一時保育っていうのは、その時あずけれるかどうかはわからないけど、一人ぐらいやったらいけるかなとかそういう印象があって。一時保育使うって言っても、なかなか難しいなっていうのがありますね。（中略）特に、双子三つ子なんて言うと 絶対無理なんで、そういう意味でも双子三つ子のお母さんは頭打ちっていうか行き詰まりやすいとは思うんですけど。一人やったら、うまく滑り込んでラッキーってことがあっても、なかなか二人三人の枠をパッととれることはないですね。普通は、一時あずかりとか民間でやっているようなところがあっても二人三人となるとそんなに無いですね。（中略）役所の相談とかで、保育園増やしてとかそういう話もあるんだったら、増やしてほしいなーとか。一時あずかりとかで双子とか三つ子もあずかれるような…（C さん）

あまり役に立たんかったな区役所、全くやったな。（F さん）

（新幹線に乗る時）「何両目から入ってください」って言われたらずっとデッキなんですよ。3 時間とか。立ってなきゃならない。1 か所だけなんです。入れる場所が。それ、しかもそこから動けないんです。新幹線のデッキの中でずっと立ちっぱなしなんです。あの、通路が通れない。入れない、通れない。まず入口通れない。で、入ったら入ったであの通路も通れない。で、通路も通れる、阪急も通れる、地下鉄も通れる、新幹線は通れない、飛行機は行ける。（F さん）

なんとか双子も入りつつ、でお姉ちゃんも入りつつというところを探してたので、で、ここの園だけだったので、本当に助かっています。（中略）入れるっていうのと、入れるように調整してくれるっていうところでの、そういう調整から始まって、なんとかは入れますよって言ってもらったので、あのお姉ちゃんの方を確保できたので、みたいな感じで言われたので。（G さん）

一時あずかりもいっぱいであずかれないし、費用もかかるから、で、双子ってだけで「うわっ学費」とかって思って。（中略）だから、その３千円とかっていうのも抵抗があったりするので…そんなんも無償にしてあげたらいいのにって勝手に。（Ｊさん）

Ⅳ．考察

１．保育士の保育に関する役割

親は保育士に対して、子どもにとってのもう一人の親のような役割と、育児の相談相手としての主に２つの役割を求めていた。先行研究においても、子育ての相談相手は、有職者の母親は、保育士への相談が 39.7％と相談相手として期待されている[6)]。

日中、自分がみていない部分の子どもの成長、例えば食事や集団生活での子どもの様子を知りたい、そのようにして自分の子どものことを理解しておきたい、そして自分の育児に活かしたいと思っていると考えられる。さらに、そのことを親自ら保育士に声をかけるのは、困難な状況も研究協力者の語りから見て取れる。多忙を極めている中での遠慮や子どももいる中でタイミングをうまく取れないなどの理由がある。

そのため保育士は、育児の悩み相談のために親に対して積極的に声をかけたり、日常的に会話したりするなどを行うとともに、親から声をかけやすい状況を作っていく必要がある。また、「多胎児をセットではなく子ども一人ひとりとして大切にみてほしい」と思っており、多胎児は、単胎児に比べ出産時、脳性麻痺や発達障害をはじめ、出産後の様々なハンディが大きいことが明らかにされている。例えば、脳性麻痺は、単胎児のおよそ 5～10 倍多発する。正常範囲の成長や発達でも全体としては、単胎児よりも遅れる傾向にある[7)]。

このようなことから保育士は、子ども一人ひとりの発達や特徴をしっかりと捉え、親と育児を共有している態度でかかわる必要があると考える。

２．保育士の親支援に関する役割

親は、保育士に対して「多胎児育児のイメージをもってほしい」とする一方、「自分の子どもは、自分で育児しないといけない」とも思っていた。このことは、一人で多胎児を抱いて、階段の登り降りや荷物の準備、検温などを行うことが体力的、時間的にも難しいため、“気づいてほしい”“手伝ってほしい”と感じているのだと考えられる。ただ、“助けてほしい”“手伝ってほしい”ということを言える親ばかりではないため、保育士と親がお互いに「声をかけやすい関係性を築きたい」と思っているのだと考えられる。

その一方で、自分で産んだ子どもは自分で育てることが、親の責任であると感じているという親の役割に縛られていたり、多胎児育児を経験していない祖父母に気軽に子どもをあずけられなかったりという他の人に SOS が出せない状況があるといった現実があった。これらは、親は心身共に疲れ、子どもへのかかわりにも余裕がなくなり、誰にも頼ることができず孤立し、夫婦だけでの育児という悪循環により、虐待の発生につながることを危惧させる。

平成 15 年 11 月 29 日から児童福祉法の改正により、保育士の定義が変わった。この法律で、保育士とは、「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及

び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう。」というように、保育士の業務として保護者も対象になった。令和2年の第46回全国保育士研修会にて「児童虐待予防のための保育所・認定こども園のかかわり」という講演演題[8)]がなされ、その期待は高い。このように、『子育て支援』は、親を支援することで、親も子どもも安心した生活を確保することができる。そのため保育士は、親に対して、一緒に子どもの成長を見守る専門職がいることを伝えていく必要がある。保育士は、子どものことを中心に考えてしまいがちだが、まず親が心の安定を図れるようにし、子どもとのかかわりの際には、ゆとりをもってかかわることができるよう、サポートすることが必要だと考える。

また、親自身の心身の状態に気づき積極的に声をかけ、家庭の状況を理解するとともに、単胎児育児の子育てを多胎児育児に当てはめて考えたり、押し付けたりすることなく、配慮してかかわることが重要である。このことは、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の子育ての支援の中に「保護者の自己決定を尊重すること」として、示されていることと同様だと考える[9)]。

３．園が行う親支援

通園する中で「園に安心してあずけたい」「園にあずけることが心のゆとりにつながっている」という想いとともに「仕事じゃなくてもあずかってほしい」という想いがあった。これは、多胎児の親は、多胎児のきょうだいを含め、子ども一人ひとりに丁寧にかかわりたいという思いや、子どもと離れ自分の時間をもつことが自分の心の安定につながっていると感じているからだと考える。多胎児の親が、心にゆとりをもって、子どもも自分も客観的にみることができ育児ができるよう、園は保育する役割を担っている。しかし、親の語りからは、まだまだ保育園は、親が仕事の休みの場合は、家庭保育をすることを当たり前だという現状があった。内閣府は、平成27年度子ども子育て支援新制度により、「保育に欠ける」から「保育の必要な児童」とし、保育サービスの対象者を広げている[10)]。この「保育の必要な児童」は入園時のことではあるが、入園後にも保護者の状況により、様々な理由で保育の必要があると考える。

多胎児育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究に示されているように、単胎児に比べて、多胎児の母親の児に対する虐待感情が2歳でみると、数倍になっている[3)]。このような社会の現状からも、多胎児育児をするうえで、親が自分自身の心身の健康のための時間（自分の用事、リフレッシュなど）の確保ができる必要性が高いことを受け止め、園は、態勢を見直す責務が課せられると考える。

Ｖ．結論

保育園を利用している多胎児の親の想いには、

- 親が保育士に期待する保育として、「子どものことを伝えてほしい」「園でやっていることが、子育てのヒントになる」「多胎児をセットではなく、子ども一人ひとりとして大切にみてほしい」「多胎で手がかかるから、子育てを一緒にしてほしい」「一緒に育児を悩み、考えてほしい」があった。

- 保育士が行う親の支援に関する想いとして、「私のことを気にかけてほしい　認めてほしい」「多胎児育児のイメージをもってほしい」「さっと気づいて手伝ってくれる」「声をかけやすい関係性を築きたい」「自分の子どもは自分で育児しないといけない」があった。
- 園が行う支援に関する想いとして、「入園前に園のことを知りたい」「園に安心してあずけたい」「多胎児の身近な情報がほしい」「園にあずけることが心のゆとりにつながっている」「仕事でなくてもあずかってほしい」「社会制度は多胎児家庭のことを分かっていない」があった。
- 保育士の役割として、多胎児の親に対して保育士自らが積極的にかかわり、まずは、親のサポートをすることを考えること、多胎児家庭の状況を理解しようという姿勢と単胎児育児の子育てを多胎児育児に当てはめて考えたり、押し付けたりすることなく、配慮して関わること、多胎児の親同士のかかわりの機会の提供が考えられた。また、保育園の役割としては、親の心身の健康のための時間の確保ができるように園の態勢を見直し、多胎児の親のアドボケーターとして行政機関などに、多胎児の親の状況を説明する役割もあると考えられた。

謝辞

育児、お仕事でお忙しい中、本研究にご協力いただきました研究参加者ならびに保育園の方々に心より感謝いたします。またご多用の中、本研究に対して熱心にご指導をいただきました神戸市看護大学の髙田昌代教授に深く感謝いたします。

【神戸市市立保育園連盟　養成向上⑤委員会　所属委員】
幼保連携型認定こども園　宝地院保育園　中川正興
ドレミキッズ保育園　濱崎史子
幼保連携型　みのり認定こども園　黒川 弘則
幼保連携型認定こども園　舞子保育園　藤本 博子
幼保連携型認定こども園　神戸学園都市 YMCA こども園　松田康之

参考・引用文献

１）日本産婦人科学会ホームページ
http://www.jsog.or.jp/modules/statement/index.php?content_id=20
（2020 年 9 月 19 日閲覧）
２）内閣府：男女共同参画白書　平成 29 年版，2017
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/honpen/b1_s00_01.html　（2020 年 9 月 19 日閲覧）
３）一般社団法人　日本多胎支援協会監修：多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究．2018
４）豊田市児童虐待事例外部検証委員会：平成 29 年度児童虐待死亡事例検証報告書令和元年６月；2019
http://www.crc-japan.net/contents/verification/pdf/190624_toyoda.pdf
５）服部律子：三つ子の 1 人への傷害致死事件を考える，助産雑誌，2019；73 巻 7 号：574-577
６）厚生労働省：第 3 回 21 世紀出生児縦断調査（平成 22 年出生児）の概況．子育ての相談相手．2012
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shusshoujib/03/index.html　（2020 年 9 月 19 日閲覧）
７）横山美江，清水忠彦，早川和生：双子,三つ子における障害児の発生状況、日本衛生学会誌，1995；49 巻 6 号：1013-1017.
８）令和２年全国保育士大会：
tps://www.z-hoikushikai.com/kensyukai/kensyukai.php?id=77（2020 年 9 月 19 日閲覧）
９）内閣府　文部科学省告示第 1 号　厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成 29 年告示〉
１０）内閣府：保育の必要性の認定について（平成 26 年度）
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/setsumeikai/h260124/pdf/s1-1.pdf
（2020 年 9 月 19 日閲覧）
１１）中村 由美子：幼児期　就園までの親子の背景と就園後に求められること　保育士養成職の立場から，チャイルド ヘルス，2020；23 巻 1 号：1344-3151